

乳児の精神発達に及ぼす育児態度の影響*

お茶の水女子大学 津 守 真**
愛育研究所 稲 毛 教 子

I 問 題

親の育児態度は乳児の精神発達に影響を及ぼすであろうか。

施設児が家庭児に比べて精神発達が遅滞し、外界に対する反応のしかたもかわつてくるのがすでに指摘されているが(1)、家庭において育てられる場合にも、親の育児態度が子どもの発達に影響を与えるはずである。親の養育法としては、授乳・離乳のしかた、及び排泄訓練などが乳児期に重要なものとしてあげられ、乳児の発達との関係について議論されてきたが、従来の研究を総合してみるならば、これらの個々の養育法は子どもの発達と必ずしも一義的な関係をもたない。子どもの発達に影響を与えるのは、個々の養育法よりも、それらの基盤にある親の態度である(2)。

乳児に対する親の態度についての研究は少ない。その多くは、幼児期に、さかのぼつて乳児期の親の態度を調べるという方法をとっており、幼児に対する親の態度を構成する一因子として乳児期の養育法を考えるには役立つが、幼児期の親の態度の分析としてはじゅうぶんではない。乳児に対する親の態度を直接に研究したものとしては、最近 Brody, S. (3) が観察法によつて母親の態度の分析を試みており、また、Williams, J. R. & Scott, R. B. (4) は、面接質問によつて親の態度を評価し、乳児の運動発達との関係を見て、寛容な育児態度の場合に、運動能力の発達がよりよくなされることを報告している。

本研究は、一方において、乳児期の親の態度と乳児の精神発達との関係をみることを目的とし、あわせて、乳児期の親の態度に関係あると思われる諸要因を検討する。

* Maternal attitude and its relationship to infant development.

** by Tsumori, Makoto (Ochanomizu University) and Inage, Noriko (Aikku Research Institute of Child Welfare)

II 方法及び手続

1 母親の育児態度を調べる方法

A 親の育児態度に関する質問 面接によつて、親の育児のやりかたをたずねる。その内容は主として次のようなものであるが、1項目ずつ形式的にたずねるといふよりも、これらの項目を中心にして、できるだけ自由に話をしてもらふようにし、生活全般を知るようにつとめた。

- (1) 乳はどのように与えていますか。
 - (a) 子どもが泣けばいつでもやる。
 - (b) 子どもの要求するときには、比較的時間にかまわないでやる。
 - (c) 厳格に時間ぎめにしている。
- (2) 赤ちゃんが泣いたときはどうしますか。
 - (a) 泣くとすぐに抱いてやる。
 - (b) 泣くときは、おむつかお乳かどちらかをみてやり、どちらでもないときは放つておく。
 - (c) 泣いても知らないで放つておくことが多い。
- (3) 夜泣いたときはどうしますか。
 - (a) 必ず気がついて抱いてあやす。
 - (b) できるだけそのままにしておくが、放つておけない。
 - (c) 泣いても知らないで放つておくことが多い。
- (4) 母親が忙しい時泣いたらどうしますか。
 - (a) 忙しくても子どものそばにいて、目をはなさないようにする。
 - (b) おむつとお乳でなければ放つておく。
 - (c) 忙しいときは泣いても放つておく。
- (5) 父親は子どもの面倒をみますか。
 - (a) 家にいて、子どもをあやしたり面倒をみるが多い。
 - (b) 家にいれば子どもの世話をする。
 - (c) めつたに子どもの顔をみたことがない。
- (6) 離乳をどのようにしていますか。または、しよう

と思つていますか。

- (a) 子どもの好きなようにしたい。
 (b) ふつう。
 (c) なるべく早く始めたい。
- (7) 排泄のしつけはいつから始めようと思つていますか。
 (a) おそくていいと思う。
 (b) ふつう。
 (c) なるべく早くして早く終えたい。
- (8) 睡眠の時間はきめてありますか。
 (a) 眠くなつてからつれてゆく、ねてから泣けばつれてくる。
 (b) ふつう。
 (c) 時間がくれば必ず床にいれ、泣いても放つておく。
- (9) 子どもがねているときは、家中で静かにしますか。
 (a) 家中で静かにする。
 (b) ふつう。やや気をつける程度。
 (c) ふだんとまづたく変りなく、大声で話したり、ラジオをつけたりする。
- (10) 指をしゃぶるとどうしますか。
 (a) そのままにしておく。なるべく気分をかえるようにする。
 (b) ふつう。
 (c) いつも手を口から離すようにしている。
- (11) 子どもが食事中に食器を自分でいじろうとしたらどうしますか。
 (a) よごれてもいじらせるようにしている。
 (b) ふつう。
 (c) よごすのでいじらせない。
- (12) 子どもがおとなの食卓をかきまわすときはどうしますか。
 (a) そのままさせておく。
 (b) ふつう。
 (c) とめることが多い。

B 面接時における親子の様子の記録 記録はあらかじめ用紙を用意しておく。そのうち主要な項目は次のようなものである。

- (1) 面接質問中の様子。
 (2) 検査者が子どもを抱いたときの様子。
 (3) 子どもをあやしたときの様子。
 (6) 玩具をみせたときの子どもの様子。
 (9) 机にかけてあるテーブルかけに対する子どもの反応と親の様子。
 (10) 母親に子どもをかえしたときの様子。

2 乳児の精神発達を調べる方法

A 発達質問紙 乳児の日常生活場面にあらわれる行動を整理して、発達の状態を自然の生活場面の中でとらえようと試みた。そのために、昭和31年5月より1年間にわたつて、3名の乳児について出生直後より定期的に家庭訪問を行ない、母親に詳細な育児日誌をつけてもらつて、家庭において観察できるような精神発達の項目を集めた。また従来出版刊行されている育児日誌を整理して比較検討した。

このようにして家庭で容易に観察できる行動を300項目集めることができたが、さらにこれらのなかから、質問してたずねやすい項目を取捨選択して190項目とした。その詳細については別の機会に報告したい。

B 乳幼児精神発達検査を行なう

3 育児意見についての質問

育児についての意見を調べるために、次の8項目について、1つずつ読んできかせ、賛成・反対・どちらでもないの意見をたずねる。項目の選択については Shoben, E. J. (5) の育児意見調査項目を参照した。(1)~(4)及び(8)は厳格—寛容度、(5)~(7)は愛着所有度(溺愛度)をみようとするものである。

- (1) 子どもに強い性格を養うために厳格なしつけが必要だと思つています。
 (2) 子どもは親のいうことに服従すべきだと思つています。
 (3) 今の子どもたちはしつけられることが少なすぎると思つています。
 (4) 子どもはおとなの会話に口をさしはさむべきではないと思つています。
 (5) 親は子どものためにすべてを犠牲にすべきだと思つています。
 (6) 子どもは4~5才になるまでは、赤ん坊のつもりで気をつけて扱かわねばならないと思つています。
 (7) 子どもは親にだだをこねるくらいでなければかわいくないと思つています。
 (8) 行儀のよいおとなしい子どもの方が、いたずらの暴れん坊よりよいと思つています。

以上8問の育児意見のそれぞれについて、賛成○、どちらでもない△、反対×の分布を作つたところ、項目によつて賛成・反対の分布が異なるので、賛成・反対の数に応じてウェイトを与えて得点を作つた。(1)(2)(3)(4)(8)の各問は厳格—寛容度に関する意見であり、(5)(6)(7)の各問は愛着所有度(溺愛度)に関する意見であるので、その得点総計をもつて、寛容度と溺愛度とした。総計が(+)となるものは、寛容または溺愛の方向を示すもので

あり、総計が(一)となるものは、厳格または無関心の方向を示すものである。

4 社会一経済状態の分類方法

被験者の社会一経済状態を次の規準に従って評価し、その合計を社会一経済状態得点とした。

A 職業 1 専門職(技術者・経理士・医師・会社重役など) 2 半専門的職業及び経営(工場経営・専門職でない会社員) 3 事務的職業及び自家営業(事務員・文具商など) 4 半熟練的職業(工員・左官・運転手など) 5 非熟練的職業

B 教育程度 父 1 大学 2 旧制専門学校 3 旧制中学校・商業学校・工業学校 4 旧制高等小学校・中学校 5 小学校 母 1 大学・旧制専門学校・短期大学 2 旧制高等女学校・高等学校 3 中学校 4 旧制高等小学校 5 小学校

C 住宅状況 1 一戸建・庭有・5室以上 2 一戸建・5室以下 3 一戸建 2~3室 アパート(上質)・工場または商店併設住宅 4 間借1室・親子3人または子ども2人以下 5 間借1室・親子以外のものが同居、または子どもが3人以上いる。

D 地域 1 高級住宅地域 2 その周囲だけが住宅地・または普通の住宅地 3 周囲は繁華街または工場地で、その周囲だけが住宅地 4 繁華街またはさびれた町並 5 スラム街

以上の規準にしたがって評価し、3つの社会一経済状態に分類した。すなわち、 S_A : 専門職・知識階級、 S_B : 小企業及び事務的職業、 S_C : 半熟練勤労階級にわけられる。

それぞれの得点分布は Table 1 に示す通りであり、それぞれの階層にしたがって、得点は重複せずに分類される。

Table 1 社会一経済状態得点分布

数字は社会一経済状態評価点の総計をあらわす

月令	2ヶ月	6ヶ月	9ヶ月	12ヶ月
S_A	8.6	8.7	8.8	9.0
S_B	14.3	10.4	14.1	13.5
S_C	19.5	18.5	19.3	18.0

5 母親の育児態度の評価

A 1 AB (面接時の質問と観察)の結果をカードに整理し、それぞれについて、次の諸側面について、評価した。

(1) 親の情緒的安定度 (特に育児に関して)――

2, 6ヶ月

+1 日常のこまかいことで、いちいちよいか悪いかを気にしない。自然な態度で子どもに接する。

0 普通

-1 日常のこまかい事で、いちいちよいか悪いかを気にする。情緒的に問題を持つている

(2) 子どもに対する接触及び愛撫の度合――2, 6ヶ月

+1 よく愛撫し、皮膚の接触が多い。

0 普通

-1 皮膚の接触が少ない。子どもに対して手をかけない。愛撫しない。

(3) 育児に関する知的度合――2, 6, 9, 12ヶ月

+1 子どもに関して注意深く、客観的に子どもをみる。子どもの要求をよくみている。

0 普通

-1 子どもの扱い方に関して不注意。一貫性を欠く。

(4) 育児形態――2, 6, 9, 12ヶ月

2, 6ヶ月 { X ほとんど1人である。
Y いつもおとなが相手をする。
Z ほとんどだっこしている。
Z' ほとんどおんぶしている。

9, 12ヶ月 { X ほとんど1人である。
X' おとなが遠くからみていれば、子どもは1人で遊んでいる。
Y' おとなと一緒にいることが多い。
Y 子どもからほとんど目をはなさない。いつも一緒にいる。

(5) 子どもに対する関心度――2, 6ヶ月

+1 子どもに対して強い関心をもつ。育児に熱心である。

0 普通

-1 子どもに対して関心をもたない。冷淡である。

(6) 子どもに対する寛容度――6, 9, 12ヶ月

+1 子どものやることをとめないでやらせることが多い。

0 普通

-1 子どものやることをとめることが多い。

(7) 以前の態度――9, 12ヶ月

+1 泣くと抱いてやり、接触が多かった。

0 普通

-1 ひとりで放っておくことが多かった。

上にみるように、評価できる親の態度の側面は、子ど

もの年齢とともに変化する。育児に関して親の情緒的安定度が問題になるのは6ヶ月以前であり、接触及び愛撫の度合が問題になるのは、やはり6ヶ月以前である。それに対して寛容度が問題になるのは6ヶ月以後であり、また以前の育児態度との変化が問題になるのは9ヶ月以後である。これらの問題になる諸側面の変化は、子どもの発達による変化と、親が育児経験を積むことによる変化とによるものであろう。

B 評価の一致度

上の諸側面について、2名の評価者が独立に評価した。その一致度は Table 2 に示すように、67.9%から100%にわたり、平均 89.8%でかなり高い一致度を示している。

Table 2 育児態度評価の評価者間の一致度(%)

	1	2	3	4	5	6	7	計
2ヶ月	90.0	96.7	93.3		93.3			93.3
6ヶ月	96.8	83.9	100.0		83.9	90.3		91.0
9ヶ月			93.3	93.3		80.0	86.7	88.3
12ヶ月			100.0	82.1		67.9	96.4	86.7

C 育児態度の類型

上に示した育児態度の諸側面の組合わせから、次のような育児態度の類型をつくることができた。月令によって評価の規準も異なるが、類似したものを同じ記号であらわして、次の類型をつくつた。

(1) 小さいときからおとなとの接触多く、育児に対する関心強く、子どもに対して寛容なもの(2, 6ヶ月—接触度+1, 安定度+1 又は 0, 関心度+1 又は 0, 育児形態Z 又は Z', 寛容度+1 9, 12ヶ月—以前の接触度+1 現在の育児形態Y 又は Y' 寛容度+1 又は 0) —A型とする。

(2) おとなとの接触が多いが、その他は特記すべき特長のないもの(2, 6ヶ月—育児形態Y, 0が2つ以上あるもの) 現在は接触多く寛容であるが、以前は接触少なかったもの(9, 12ヶ月—育児形態Y 又は Y', 以前の接触-1 寛容度+1 又は 0) —B型とする。

(3) おとなとの接触度少ないが、その他は特記すべき特長のないもの(2, 6ヶ月—育児形態X, 0が2つ以上あるもの) 以前は接触少なく、現在寛容度小または接触度少ないもの(9, 12ヶ月—以前の接触度-1, 寛容度-1 又は 0, 育児形態X 又は Y) —B'型とする。

(4) 小さいときより接触度少なく、寛容度・関心度も少ないもの(2, 6ヶ月—接触度-1, 安定度・関心度

-1 又は 0, 寛容度-1, 育児形態X 9, 12ヶ月—以前の接触度-1, 育児形態X 又は X' 寛容度-1 又は 0) —C型とする。

(5) 安定度が少なく、接触度・関心度は多いもの(2, 6ヶ月—安定度-1, 接触度+1, 関心度+1) —D型とする。

(6) 知的でないもの(2, 6, 9, 12ヶ月—知的度-1) —E型とする。

上の6つの類型のうち、A B B' C はそれぞれ程度の相違なので、A+B をひとつにし、B'+C をひとつにまとめることができ、またDEから安定度・知的度の2つを無視すれば、上の2つのいずれかにすることができるので、後に発達との関係をみるときは、(A+B) (B'+C) の2種の育児態度においてみることにする。すなわち、(A+B) は接触多く寛容なもの、(B'+C) は接触少なく厳格なものと考えることができる。

D 母親の育児態度に関する質問の結果と、面接時の親子の様子の記録とを1人ずつについてカードに記載し、上に述べた基準に従って評価したのであるが、その1例を示すならば次のようなものである。

例1 6-1 月令 5ヶ月23日 第1子, 男, 父会社技師, 大学卒, 母大学卒, 1戸建, 4室15畳, 住所, 世田谷区, 住宅地-S_A

授乳は時間通りにやる。時間がくる前に泣くことはない。赤ん坊はほとんど泣かないが、泣いたときはおむつをみてやり、何でもなければ放っておく。母親が忙しいときは、泣いても放っておく。4ヶ月より離乳を始めたが失敗してまたやりなおす。排泄のしつけはなるべく早く終わりたいと思う。子どもがねるときもふだんと変りなく大声で話したり、ラジオをつけたりする。指をしゃぶるときはそのままにしておき、なるべく気分をかえるようにする。子どもはふだんひとり放つてある。

面接時、親は尋ねられたことだけに答え、あつさりした態度。検査者があやすとあやすことに参加する。子どもを母親に返して抱いてもらったときも、表情を示さない。 育児態度評価：安定度0 接触度-1 保育形態X 関心度-1 寛容度0 知的度0 全体評価C 育児意見：厳格-寛容度 +1(寛容) 愛着所有度 -2(非溺愛)

例2 保健所6-11 月令 6ヶ月0日 第3子 男 父マッサージ業 高小卒, 母高小卒, 1戸建2室 住所 品川区商店街-S_B

子どもが泣けばいつでも授乳する。泣くとすぐに抱いて乳をやる。ときどき夜泣きするが、大たい気づいてあやす。母親が忙しいときに泣いても、そばにいつて面倒

をみることが多い。母が手をはなせないときは誰かがそばにいてやる。父親は家において子どもの面倒をみることが多い。子どもがねているときは、兄たちにさわがないように注意する程度でふだんとあまり変らない。指をしやぶるが別にとめない。食事中に食器をいじろうとしたら、汚れてもいじらせている。おとなの食卓をかきまわしても、とめないでそのままにさせておく。

面接中母親はいろいろの様子を加えて答える。検査者があやすと母親もおもしろそうに一緒にあやす。母親はよく笑う。子どもはキョロキョロしている。腹ばいにする子どもは気嫌よく遊び、母親はそばでみている。母親に返すと、母親はほつとした様子でおっぱいをふくませる。

育児態度評価：安定度0 接触度+1 保育形態Z 関心度0 寛容度+1 知的度0 全体評価A

6 精神発達得点

面接による精神発達得点は、できるものに1点を、疑問のものに.5点を与えて得点を計算した。また下位項目ごとに得点を計算した。下位項目は、2ヶ月では、運動・感覚・社会 6ヶ月では、運動・手の操作・社会・食事行動 9ヶ月・12ヶ月では、運動・探索行動・社会・言語である。

各下位項目群ごとに、中央値から上下2群にわけて考察をすすめた。すなわち、発達が良い方が上、発達の悪い方が下である。また発達検査も発達指数について、中央値から上下2群にわけて考察をすすめた。

7 被験者

被験者は、2, 6, 9, 12ヶ月の月令の乳児。愛育研究所附属病院外来の健康相談、及び品川保健所健康相談に来所した乳児の中から、熟産・正常産・健康乳児を対象とした。

また、育児態度に関係あると思われる社会階層については、前述のように3つの階層からとつてある。

月令は各月令とも誕生日の前後2週間以内とした。被験者の数は Table 3 に示すように各月令とも約30名ずつ合計120名である。

Table 3 被験者数

月令	愛育会	保健所	計
2ヶ月	14	16	30
6ヶ月	19	13	32
9ヶ月	13	17	30
12ヶ月	14	14	28
計	60	60	120

III 結 果

1 育児態度と発達との関係

育児態度と発達との関係をみるに当つて、前述の育児態度の6類型を更に大別して2つにわけ、A+Bを接触多く寛容な育児態度、B'+Cを接触少なく厳格な育児態度とした。また、発達の程度については、各月令・各下位項目群ごとに、その中央値を境に上下2群にわけて育児態度との関係を χ^2 で検定した。発達検査による発達指数についても、同様にして2群にわけて検定した。

A 2ヶ月児

(1) 運動発達

Table 4-A にみるように、接触の多い育児態度(A+B)に運動発達のよいものが多いという傾向があるが統計的には有意でない。

(2) 感覚

育児態度との関係は認められない。

(3) 社会的発達

Table 4-B にみるように、接触の多い育児態度(A+B)に発達のよいものが多い傾向があるが統計的には有意でない。

(4) 発達総合

発達の全得点と育児態度との間には、有意な関係は認められない。

(5) 優劣2群の比較

発達の特に良いものと、特に悪いものを10名ずつとり、育児態度との関係をみたが、明瞭な関係は認められなかった。

Table 4-A 育児態度と運動発達との関係——2ヶ月

態 度	運 動		計
	発達上	発達下	
接触多いもの (A+B)	12	6	18
接触少ないもの (B'+C)	4	8	12
計	16	14	30

Table 4-B 育児態度と社会的発達との関係——2ヶ月

態 度	社 会		計
	発達上	発達下	
接触多いもの (A+B)	11	7	18
接触少ないもの (B'+C)	4	8	12
計	15	15	30

B 6ヶ月児

(1) 運動発達

Table 5—Aに示すように、接触の多い育児態度に運動発達のよいものが多い傾向があるが、統計的には有意でない。

(2) 手の操作

接触の多い育児態度に発達のよいものが多い傾向があるが、統計的には有意でない。

(3) 社会的発達

Table 5—B にみるように、接触の多い育児態度に社会的発達のよいものが多い。 χ^2 検定によると、統計的にも有意である。(1%以下の危険率で有意)

(4) 食事行動

6ヶ月児には食事に関する項目が多くあらわれたので食事行動を別個に取り出した。この点では、Table 5—Cにみるように、接触の多い育児態度に発達のよいものが多い。これは統計的にも有意である。

(5) 発達総合

発達の全得点と育児態度との間には、やや関係ある傾向が認められるが、統計的には有意でない。

(6) 優劣2群の比較

発達の特に良いものと、特に悪いものとを9名ずつとり、育児態度との関係をみたところ、Table 5—Dにみるように、接触の多い育児態度に発達のよいものが著しく多い。(1%以下の危険率で有意)

(7) 発達指数

発達検査は全員に施行できず、人数が少ないので、2、6ヶ月合わせて42名について育児態度との関係をみた。Table 5—Eに示すように、接触の多い育児態度に発達

Table 5—A 育児態度と運動発達との関係——6ヶ月

態度 \ 運動	発達上	発達下	計
接触多く寛容 (A+B)	13	7	20
接触少く厳格 (B'+C)	3	9	12
計	16	16	32

Table 5—B 育児態度と社会的発達との関係——6ヶ月

態度 \ 社会	発達上	発達下	計
接触多く寛容 (A+B)	16	4	20
接触少く厳格 (B'+C)	3	9	12
計	19	13	32

Table 5—C 育児態度と食事行動の発達との関係——6ヶ月

態度 \ 食事	発達上	発達下	計
接触多く寛容 (A+B)	15	5	20
接触少く厳格 (B'+C)	2	10	12
計	17	15	32

Table 5—D 発達の良いものと悪いもの9名ずつについて、育児態度と発達との関係——6ヶ月

態度 \ 発達	発達上	発達下	計
接触多く寛容 (A+B)	8	2	10
接触少く厳格 (B'+C)	1	7	8
計	9	9	18

Table 5—E 発達指数と育児態度との関係——2、6ヶ月

態度 \ 指数	指数上	指数下	計
接触多く寛容 (A+B)	13	10	23
接触少く厳格 (B'+C)	6	13	19
計	19	23	42

指数の高いものが多い傾向があるが、統計的には有意でない。

(8) 子どもの反応

面接場面の子どもの反応を3段階に評価して、育児態度との関係をみたが、明瞭な関係は認められなかった。

C 9ヶ月児

(1) 運動発達

育児態度と運動発達の間には、明瞭な関係が認められなかった。

(2) 探索行動

Table 6—Aにみるように、接触多く寛容な育児態度に発達のよいものが多い。これは統計的に1%以下の危険率で有意である。

(3) 社会・言語の発達

Table 6—Bにみるように、接触が多く寛容な育児態度に発達のよいものが多い傾向がある。(5%の危険率で有意)

(4) 発達総合

発達の全得点と育児態度の間には、Table 6—Cにみるように、かなり関係ある傾向がみられるが、統計

的には有意でない。

(5) 優劣2群の比較

発達の特によいもの10名と、発達の特に悪いもの7名をとつて、育児態度との関係を見ると、発達のよいものに接触多く寛容な育児態度が多い傾向がある。

(6) 子どもの反応

子どもの反応と育児態度との関係を見ると、Table 6—Dにみるように、接触多く寛容な育児態度に積極的な反応を示す傾向がある。

Table 6—A 育児態度と探索行動との関係——9ヶ月

態度 \ 探索	発達上	発達下	計
接触多く寛容 (A+B)	14	3	17
接触少く厳格 (B'+C)	3	10	13
計	17	13	30

Table 6—B 育児態度と社会的発達との関係

態度 \ 社会	発達上	発達下	計
接触多く寛容 (A+B)	14	3	17
接触少く厳格 (B'+C)	5	8	13
計	19	11	30

Table 6—C 育児態度と発達(総合)との関係——9ヶ月

態度 \ 発達	発達上	発達下	計
接触多く寛容 (A+B)	12	5	17
接触少く厳格 (B'+C)	4	9	13
計	16	14	30

Table 6—D 子どもの反応と育児態度との関係——9ヶ月

態度 \ 子どもの反応	接触多く寛容 (A+B)	接触少く厳格 (B'+C)	計
積極的(+)	8	2	10
どちらでもない(0)	6	4	10
消極的(-)	3	7	10
計	17	13	30

D 12ヶ月児

(1) 運動発達

育児態度と運動発達の間には、明瞭な関係は認められなかった。

(2) 探索行動

育児態度と探索行動の間にも、明瞭な関係は認められない。

(3) 社会・言語の発達

育児態度と社会・言語の発達との関係にも明瞭な関係は認められない。

(4) 発達総合

Table 7—Aにみるように、発達の全得点と育児態度との関係は認められない。

(5) 優劣2群の比較

発達のよいものと悪いものとを7名ずつとつて比較したが、育児態度との関係は認められなかった。

(6) 子どもの反応

子どもの反応と育児態度との関係を見ると、Table 7—Bにみるように、接触多く寛容な育児態度に子どもの積極的なものが多く、接触少く厳格な育児態度は子どもの反応が消極的である。

(7) 発達指数

9ヶ月と12ヶ月をあわせて40名について、発達指数と育児態度との関係を見ると、統計的には有意でないが、接触多く寛容な育児態度に指数の高いものが多い傾向を認めることができる。

Table 7—A 育児態度と発達(総合)との関係——9ヶ月

態度 \ 発達	発達上	発達下	計
接触多く寛容 (A+B)	11	12	23
接触少く厳格 (B'+C)	3	2	5
計	14	14	28

Table 7—B 子どもの反応と育児態度との関係——12ヶ月

態度 \ 子どもの反応	接触多く寛容 (A+B)	接触少く厳格 (B'+C)	計
積極的(+)	8	0	8
どちらでもない(0)	6	0	6
消極的(-)	0	3	3
計	14	3	17

以上の結果を総括して示すと Table 8 のようになる。

表中、 $\#$ は1%以下の危険率で育児態度との関係は認められるもの、 $+$ は5%以下の危険率で有意なもの、 Δ は統計的には有意ではないが、傾向の認められるものである。ここで注目すべきことは、いずれの場合も、接触

多く寛容な育児態度のものに発達がよりすぐれる傾向があるということである。

Table 8 育児態度と発達との関係要約

	2ヶ月	6ヶ月	9ヶ月	12ヶ月
運 動	△	△		
感 覚				
操 作		△		
社 会	△	+	+	
食 事		+		
探 索			+	△
発 達 総 合		△	△	
優劣2群の比較		+	△	
発 達 指 数	△	△	△	△
子どもの反応			△	△

+ 1%以下の危険率で有意のもの
 + 5%以下の危険率で有意のもの
 △ 統計的に有意ではないが、傾向がみられるもの

2 育児態度と関係ある諸要因

A 育児態度と社会一経済状態との関係

育児態度と社会一経済状態との関係は Table 9-A に示すように、2ヶ月及び6ヶ月では関係あるようにみえる。すなわち、社会一経済状態が上のもの(S_A)に接触少なく、厳格な育児態度が多く、社会一経済状態が中及び下のもの(S_BとS_C)に接触度が多く寛容なものが多い傾向がみられる。しかし、この関係は Table 9-B に示すように、9及び12ヶ月にあてはまらない。2、6ヶ月の場合、第1子だけをとつてみても、Table 10にみるように同様の傾向がみられるが、統計的には有意でなくなる。

すなわち、年少のものについては、社会一経済状態の高いものに接触の少ない育児態度の多い傾向がみられるが、その関係は明確ではない。

Table 9-A 育児態度と社会一経済状態との関係——2、6ヶ月

社会一経済状態	態度	接触多く寛容 (A+B)	接触少く厳格 (B'+C)	計
S _A		9	16	25
S _B		12	6	18
S _C		9	1	10
計		30	23	53

Table 9-B 育児態度と社会一経済状態との関係——9、12ヶ月

社会一経済状態	態度	接触多く寛容 (A+B)	接触少く厳格 (B'+C)	計
S _A		15	7	22
S _B		18	6	24
S _C		7	5	12
計		40	18	58

Table 10 育児態度と社会一経済状態との関係——第1子のみ 2、6ヶ月

社会一経済状態	態度	接触多く寛容 (A+B)	接触少く厳格 (B'+C)	計
S _A		5	8	13
S _B		11	4	15
S _C		5	1	6
計		21	13	34

B 社会一経済状態と育児意見

(1) 厳格—寛容度

育児意見 I 厳格—寛容度について (+) の意見を寛容、0 及び (-) の意見を厳格として、社会一経済状態別にその頻数をとつてみると、Table 11のように、社会一経済状態上のもの(S_A)に寛容な意見が多く、社会一経済状態下のもの(S_C)に厳格な意見が多い。この関係を χ^2 検定すれば、1%で有意となる。また第1子のみをとつてみると Table 12-A のように同様の傾向がみられ、 χ^2 検定をすると、1%で有意であった。

(2) 愛着所有度 (溺愛度)

育児意見 II 愛着所有度について、(+), 0 の意見を溺愛、(-) の意見をしからざるものと考えて、社会一経済状態別に頻数をとると、社会一経済状態によつて有意な差が認められるが(χ^2 : 1%で有意)、第1子のみをとつても Table 12-B にみるように有意な差がみられる(χ^2 : 2.5%で有意)。すなわち、S_A に溺愛的でない意見が多く、S_C に溺愛的でない意見が少ない (Table 12-B)。

C 育児態度と育児意見との関係

Table 13-A, Bにみるように、育児態度と育児意見 I・IIの間にはほとんど関係は認められない。すなわち接触が多く寛容な育児態度に寛容な育児意見が多いのもなく、厳格な育児態度の場合に溺愛的意見が少ないとも限らない。

Table 11 育児意見 I と社会経済状態との関係—2, 6, 9, 12ヶ月

社会—経済状態	育児意見		計
	寛容な意見 (+)	厳格な意見 (0, -)	
S _A	32	17	49
S _B	15	26	41
S _C	7	21	28
計	54	64	118

Table 12—A 育児意見 I と社会経済状態との関係 第1子のみ—2, 6, 9, 12ヶ月

社会—経済状態	育児意見		計
	寛容な意見 (+)	厳格な意見 (0, -)	
S _A	22	12	34
S _B	12	23	35
S _C	2	16	18
計	36	52	87

Table 12—B 育児意見 II と社会経済状態との関係 第1子のみ—2, 6, 9, 12ヶ月

社—会経済状態	育児意見		計
	溺愛, 愛着 (+, 0)	非溺愛 (-)	
S _A	15	19	34
S _B	22	13	35
S _C	15	3	18
計	52	35	87

Table 13—A 育児態度と育児意見 I との関係 —2, 6, 9, 12ヶ月

意見	態度		計
	接触多く寛容 (A+B)	接触少く厳格 (B'+C)	
寛容な意見 (+)	31	18	49
厳格な意見 (0)	38	22	60
計	69	40	109

Table 13—B 育児態度と育児意見 II との関係 —2, 6, 9, 12ヶ月

意見	態度		計
	接触多く寛容 (A+B)	接触少く厳格 (B'+C)	
溺愛的意見 (+)	39	20	59
非溺愛的意見 (0)	30	20	50
計	69	40	109

D 育児態度と出生順位

Table 14 にみるように出生順位と育児態度との関係は、第1子に接触多く寛容な育児態度が多い傾向があるが統計的には有意でない。(χ²: 10%以上の危険率)

E 出生順位と育児意見

Table 15—A, Bにみるように、出生順位と育児意見との間にも明瞭な関係は認められない。

Table 14 出生順位と育児態度との関係 —2, 6, 9, 12ヶ月

	第1子	第2子	計
接触多く寛容 (A+B)	59	19	78
接触少く厳格 (B'+C)	27	15	42
計	86	34	120

Table 15—A 出生順位と育児意見 I との関係 —2, 6, 9, 12ヶ月

育児意見	出生順位		計
	第1子	第2子	
寛容 (+)	36	18	54
厳格 (-, 0)	51	13	64
計	87	31	118

Table 15—B 出生順位と育児意見 II との関係 2, 6, 9, 12ヶ月

育児意見	出生順位		計
	第1子	第2子	
溺愛 (+, 0)	52	15	67
非溺愛 (-)	35	16	51
計	87	31	118

F 育児態度と年齢との関係

Table 16にみるように、育児態度は年齢によつて多少の変化をみる。

Table 16 育児態度と年齢との関係

		2ヶ月	6ヶ月	9ヶ月	12ヶ月
接触多く寛容	A	10	11	8	12
	B	2	7	9	11
接触少く厳格	B'	4	6	1	2
	C	7	6	9	3
不安定 D		5	2	0	0
非理知的 E		2	0	3	0

(1) 母親の情緒的安定度は、2, 6ヶ月において問題となるが、9, 12ヶ月にはほとんど問題にならない。

(2) 12ヶ月には接触多く寛容な態度が著るしく増加する。これはこの頃の子どもの活動性によるものであろう。

(3) 半年以前には接触が少なかつたのが、次第に接触が増加しているものが、9ヶ月で7例、12ヶ月で11例あり、それに対して半年以前には接触が多かつたのが、9, 12ヶ月で接触が減少しているものは1例もない。すなわち、年令の増加とともに接触は増加の傾向にある。

G 育児意見と年令との関係

育児意見と年令の間には明瞭な関係は認められない。

H 育児意見と発達

育児意見と発達との関係は、各月とも明瞭な傾向を認めることはできなかつた。また、育児意見が寛容で育児態度も接触多く寛容のもの、育児意見が厳格で育児態度も接触少く厳格であるものについて、特に検定してみたが、いずれも発達との関係は明瞭でなかつた。

IV 考 察

1 発達質問紙による発達得点の検討

(1) 発達質問紙による発達得点と、精神発達検査による指数との関係をみるために、2, 6, 9, 12ヶ月、各月令についてそれぞれの順位を計算し、スピアマンの列位相関をとつた。その結果、2ヶ月で.58, 6ヶ月で.56, 9ヶ月で.92, 12ヶ月で.75, という相関が得られた。すなわち、乳幼児精神発達検査と、ここに使用した発達質問紙とは、ある程度の相関がみられており、発達質問紙による結果が妥当であることを示している。もちろん発達質問紙は、乳幼児精神発達検査とその項目を異にし、強調点も違っているから、たとえその結果がくいちがつたとしても当然である。発達質問紙においては、できるだけ日常生活の中で容易に観察できるような項目を選択してあり、子どもの日常生活の全般が反映されやすい。特に、育児態度に相即的な発達面は反映されやすいと考えられる。また、外界に対する積極性を反映している項目が多いことも発達質問紙の特徴である。

(2) 次に各月令とも、乳児の年令に約1ヶ月の開きがあるので、発達質問紙の結果が、むしろ月令によつて規定され、月令の高いものに大きく、年令の低いものに小さい傾向があるかどうかを検討するために、年令と発達得点との列位相関をとつた。その結果は、2ヶ月.13, 6ヶ月.11, 9ヶ月.01, 12ヶ月.19となつて、年令との相関はまったく認められなかつた。

2 発達程度に影響を及ぼす他の諸要因について

本研究の被験乳児は、すべて正常熟産のものであつて早産・遅産のものを除いてあり、また出生時体重2,500グラム以下の未熟児も除いてある。また鉗子分娩、帝王切開などの異常分娩のものも除いてある。したがつて、これらの点で発達に影響を与える要因は、考慮に入れないでよい。

出生月及び検査月の影響。資料をとつたのは、2, 6ヶ月児については、3月末より5月初旬にかけて、9, 12ヶ月については7月中旬より9月初旬にかけてすべての資料をとつたので、それぞれの月令の中では出生月及び検査月による影響は考えられない。

3 母親の育児態度が乳児の発達に影響を及ぼすことについて

乳児期の発達は成熟の要因によつて規定される場所が大きいことは、従来より数多くの研究によつて示されている。そこに母親の育児態度はどのように働くのであろうか。

成熟要因が強く働くと考えられている研究の主要領域は運動能力の発達であるが、Williams & Scottの研究では、この運動能力の領域でさえ、母親の育児態度が影響をもつことを示している。そこで検討されているのは運動領域の側面だけである。本研究の結果では、運動能力の面には親の育児態度の影響するところはむしろ小さい。この点がWilliams & Scottの研究との相異点である。本研究で、親の態度が影響を与えていると考えられるのは、社会的行動、食事行動及び探索行動である。これらの発達の側面においては、個体が外界に対して働きかける面がつよい。すなわち、外界に対する積極性を示している。

親と子どもとの接触が多く寛容な育児態度の場合には、親が子どもに対して安定感をあたえ、諸能力の発達を促すことが考えられるとともに、子どもに対して刺激が与えられる機会が多く、従つて学習する機会が多くなり、また子どもが外界に対して働きかけるときに、それを妨げられず、積極的に探索することを許されることを意味する。すなわち、子どもが刺激を与えられず、禁止されることが多い場合に比べて、子どもの積極性が促進される機会が豊富である。本研究において、接触多く寛容な育児態度が発達を促進させる傾向にあるのは、このような外界に対する積極性を促進させているものと解釈することができよう。他面からいえば、育児態度は成熟の要因に加えて、その上に働くものである。

次に本研究においては、6ヶ月と9ヶ月において、育児態度の影響が著るしく、2ヶ月及び12ヶ月において、

育児態度との関係は比較的少ない。2ヶ月において、育児態度との関係がみられないことは、まだ育児態度の影響がじゆうぶんにあらわれるほどの期間を経っていないことによるのであろう。また12ヶ月において、育児態度との関係が少ないのは、この時期には正常な乳児は大が移動能力をそなえ、あるいは這い這いし、あるいはつかまり歩きをして、多かれ少なかれ活潑になり、母親は子どもから目を離せないという状況になる。このように子どもの及ぼす影響が強くなるので、母親の態度もその方向に一様化してくる。このことは年令による育児態度の変化にもみられ、12ヶ月には接触少なく厳格な育児態度は著しく減少する。親はそうならざるを得なくなるのである。そして子どもの発達との関係も、他の要因にかくされてしまう。この後、さらに発達と育児態度との関係が明瞭な形であられるのは、いつごろ、どういう形であろうか。今後に残された問題である。

V 結 論

乳児期の育児態度と精神発達との関係について検討した結果、親の育児態度はいろいろの要因によつて左右されるが、子どもとの接触が多く寛容な育児態度の方が、接触が少なく厳格な育児態度に比して、子どもの精神発達がすぐれる傾向があることを結論することができる。特に6ヶ月及び9ヶ月の社会的行動及び外界に対する積極性において顕著である。

VI 要 約

1 乳児期の母親の育児態度と乳児の精神発達との関係のみ、あわせて乳児期の親の態度に関係ある諸要因を検討することを目的とし、2, 6, 9, 12ヶ月の乳児120名について面接質問を主とする研究を行なった。

2 親の育児態度を調べる方法として、(1) 面接質問により、泣いたときの扱い方など約10項目の育児場面におけるやり方を尋ねる。(2) 面接中の母子の様子を観察した。それらの結果を評価して、接触多く寛容な育児態度と接触少なく厳格な育児態度とにわけた。また育児意見についても検討した。

3 乳児の精神発達を調べる方法として、家庭における日常生活場面の発達項目より成る発達質問紙を主として用い、乳幼児精神発達検査を併用した。

4 育児態度と発達との関係は、(1) 2ヶ月児では運動と社会的発達について、接触の多い育児態度の場合、発達がすぐれている傾向があるが、全体としてみると、その関係は明瞭でない。(2) 6ヶ月児では、社会的及び食事行動の発達について、接触の多い育児態度の方が発

達がすぐれており、運動・手の操作・発達全体についても同様の傾向が認められる。(3) 9ヶ月児では探索行動と社会的発達について、接触多く寛容な育児態度の方が発達がすぐれており、発達全体及び子どもの反応についても同様の傾向が認められる。(4) 12ヶ月児では、探索行動と子どもの反応について接触多く寛容な育児態度の方が発達がすぐれている傾向が認められるが、全体としては育児態度と発達との関係は認められない。

5 育児態度と関係ある諸要因について、(1) 育児態度と社会—経済状態との関係は、生後半年以前のものについて、社会—経済状態上のものに接触の少ない育児態度の多い傾向がみられるが、全体としてみると、育児態度と社会—経済状態との間には明瞭な関係は認められなかった。(2) 育児意見と社会経済状態の関係は社会—経済状態上のものに寛容な育児意見が多く、社会—経済状態下のものに厳格な育児意見が多い。また社会—経済状態上のものに溺愛的でない意見が多い。(3) 育児態度と育児意見との間には明瞭な関係は認められない。(4) 育児態度と出生順位との関係は、第1子に接触多く寛容な育児態度の多い傾向があるが明確ではない。(5) 出生順位と育児意見との関係は、第1子に寛容・溺愛の意見が多く、第2子に厳格で溺愛でない意見が多い傾向がある。(6) 育児態度は、乳児期には年令の増加とともに寛容の方向にむかう傾向がある。(7) 育児意見と年令との間には明瞭な関係は認められない。(8) 育児意見と発達との関係は、明瞭な傾向を認めることはできなかった。6 子どもとの接触が多く、寛容な育児態度の方が、子どもの精神発達がすぐれる傾向があることを結論することができる。

文 献

- (1) 池田由子：乳児院収容児の精神医学的研究 精神衛生研究 3号 1955, 42~96.
- (2) 津守 真：社会階級と子供の扱い方及びその影響との関係 児童心理と精神衛生 4巻4号 1954, 60~80.
- (3) Brody, Sylvania: *Patterns of mothering*. International University Press, 1956.
- (4) Williams, J. R. & Scott, R. B. : Growth and development of negro infants. IV. Mother development and its relationship to child rearing practices in two groups of negro infants. *Child Development*, 1953, 24, 103~122.
- (5) Shoben, E. J. Jr. : The assessment of parental attitudes in relation to child adjustment. *Genetic Psychology Monograph*, 1949, 39, 101~148.

(1957年10月29日受稿)